

第2節 高校生の学習観・成績観と学力

1. 成績観と学力

① 成績の自己評価と学力

主観的な成績評価は客観的な学力偏差値と相関はするが、完全に一致しているわけではない。上位ランク校、中上位ランク校で相関が高く（主観的な成績評価と客観的な学力偏差値の一致度が高い）、中下位ランク校、下位ランク校では相関が低い傾向がある。



現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか。
教科の現在の成績は、学年の中でどのくらいですか。

今回の調査では、生徒自身に、①「現在の総合的な成績」（学年の中で）、②「数学の成績」、③「国語の成績」、④「英語の成績」を答えてもらっている。これらは、主観的な成績の認識を示すといっていよう。この主観的な成績と「進研模試」の学力偏差値の間には、いったいどのような関連がみられるだろうか。

まず総合的な成績の自己評価と、3教科合計の偏差値の関係をみてみよう（表2-2-1）。どの学校ランクにおいても、総合的な成績の自己評価と学力階層の間にはゆるやかな関係がみられる。たしかに、学力上位層の生徒は、自分の成績を高く位置づける傾向がある。しかし、学力上位ではあっても、自己評価は低い生徒も存在する。主観的な成績評価は客観的な学力偏差値と相関はするが、しかし、完全に一致しているわけではない。

学校ランク別に、「総合」「数学」「国語」「英語」に分けて、主観的な成績評価と客観

的な学力の相関係数を示したのが、表2-2-2である。なお相関係数の計算にあたっては、質問紙における選択肢番号を逆に設定して相関係数が正の値をとるよう、操作を加えた。

「総合的な成績」の自己評価と、「3教科合計の偏差値（学力）」の相関は、およそ0.5から0.65の範囲にある。上位ランク校、中上位ランク校で相関が高く、中下位ランク校、下位ランク校で低い。相対的に低いランクの高校では、3教科以外の教科の成績が総合的な成績に大きな影響を与えている、あるいは客観的な学力が相対的にみえにくい何らかの背景があるのかもしれない。各教科における主観的な成績評価と客観的な学力の相関は、「英語」で高く（0.50から0.61）、「数学」がこれに次ぎ（0.47から0.59）、「国語」でもっとも低い（0.32から0.49）。「総合的な成績」と同様、やはり学校ランクが低いほうが、相関が落ちる。

表2-2-1 成績の自己評価（学校ランク別×3教科合計の学力階層別）

（％）

上位ランク校

		3教科合計の学力階層				
		学力上位階層 (582)	学力中上位階層 (220)	学力中位階層 (176)	学力中下位階層 (107)	学力下位階層 (44)
成績の自己評価 (総合的な成績)	1(上のほう)	5.3	0.5	0.6	0.0	0.0
	2	17.5	4.1	1.7	0.0	0.0
	3	27.3	18.2	13.1	4.7	2.3
	4(真ん中)	19.2	25.0	22.2	8.4	4.5
	5	10.5	22.3	22.2	15.9	2.3
	6	7.7	15.5	25.6	30.8	38.6
	7(下のほう)	3.8	8.2	14.2	36.4	52.3
	無答・不明	8.6	6.4	0.6	3.7	0.0

中上位ランク校

		3教科合計の学力階層				
		学力上位階層 (127)	学力中上位階層 (186)	学力中位階層 (217)	学力中下位階層 (178)	学力下位階層 (89)
成績の自己評価 (総合的な成績)	1(上のほう)	11.8	1.6	0.9	0.0	0.0
	2	28.3	10.8	3.2	1.1	0.0
	3	36.2	31.2	17.5	6.7	3.4
	4(真ん中)	14.2	31.2	28.1	19.7	10.1
	5	6.3	18.3	22.6	25.8	12.4
	6	0.0	4.8	18.0	27.5	29.2
	7(下のほう)	0.8	1.1	8.8	16.9	43.8
	無答・不明	2.4	1.1	0.9	2.2	1.1

中下位ランク校

		3教科合計の学力階層				
		学力上位階層 (24)	学力中上位階層 (61)	学力中位階層 (74)	学力中下位階層 (101)	学力下位階層 (179)
成績の自己評価 (総合的な成績)	1(上のほう)	20.8	4.9	1.4	1.0	0.6
	2	50.0	27.9	16.2	5.9	1.1
	3	20.8	34.4	32.4	21.8	8.4
	4(真ん中)	4.2	14.8	28.4	37.6	27.4
	5	0.0	8.2	9.5	13.9	22.3
	6	0.0	4.9	4.1	5.0	17.3
	7(下のほう)	0.0	3.3	5.4	9.9	19.0
	無答・不明	4.2	1.6	2.7	5.0	3.9

下位ランク校

		3教科合計の学力階層				
		学力上位階層 (7)	学力中上位階層 (19)	学力中位階層 (64)	学力中下位階層 (130)	学力下位階層 (305)
成績の自己評価 (総合的な成績)	1(上のほう)	71.4	15.8	9.4	3.8	1.3
	2	28.6	15.8	17.2	14.6	5.6
	3	0.0	52.6	39.1	32.3	15.1
	4(真ん中)	0.0	10.5	20.3	27.7	26.2
	5	0.0	0.0	12.5	9.2	18.7
	6	0.0	0.0	1.6	5.4	17.0
	7(下のほう)	0.0	0.0	0.0	5.4	13.8
	無答・不明	0.0	5.3	0.0	1.5	2.3

注) ()内はサンプル数。

表2 - 2 - 2 教科の学力と成績の自己評価の相関(学校ランク別)

		相関係数			
		総合成績	数学	国語	英語
学校 ラン ク	上位ランク校 (1462)	0.600	0.585	0.420	0.613
	中上位ランク校 (824)	0.644	0.569	0.491	0.612
	中下位ランク校 (619)	0.577	0.560	0.448	0.562
	下位ランク校 (903)	0.498	0.470	0.315	0.504

注1) 総合成績 = 3教科合計の偏差値と総合的な成績の自己評価の相関。
各教科 = 当該教科の偏差値と当該教科の成績の自己評価の相関。

注2) ()内はサンプル数。

②とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績と学力

成績アスピレーション（とりたいと思う成績）は、学力上位層ほど高い。また、学業的能力の自己概念（今の成績はともかくうんとがんばればとれると思う成績）も、学力上位層ほど高い。しかし、がんばれば校内で中位以上の成績がとれると、大多数の生徒が考えている。

Q

あなたはどのくらいの成績がとれたらいいと思いますか。
現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

次に、とりたいと思う成績（成績アスピレーション）についてみてみよう（図2-2-1）。どの学力階層を観察してみても、「中の下」以下（「5」「6」「7」=7段階に分けたときの第5～第7カテゴリ）の成績をとりたいと答えた生徒は、ごく少数にとどまる。しかしながら、学力上位層ほど、より上位の成績をとりたいと考えている。「学力上位階層」で「1」（第1カテゴリ=最上位）の成績をとりたいと答えた生徒は50.9%であるのに対して、「学力下位階層」では31.4%がそう答えたにすぎない。成績アスピレーションは、学力上位層ほど高いといえる。

今の成績はともかく、うんとがんばればど

のくらいの成績をとれるか（学業的能力の自己概念）については、どうだろうか（図2-2-2）。がんばれば「1」（第1カテゴリ）の成績をとれると思っているのは、「学力上位階層」で44.1%、以下、学力階層が低下するにつれて、30.5% 28.4% 26.4% 19.8%と少なくなっていく。ただし、がんばっても「中の下」以下（「5」「6」「7」）の成績しかとれないと思っているのは、どの学力階層でもごく少数である。学業的能力の自己概念は、学力上位層ほど高いが、しかし、がんばれば校内で中位以上の成績がとれると、大多数の生徒が考えている。

図2-2-1 とりたいと思う成績(3教科合計の学力階層別)

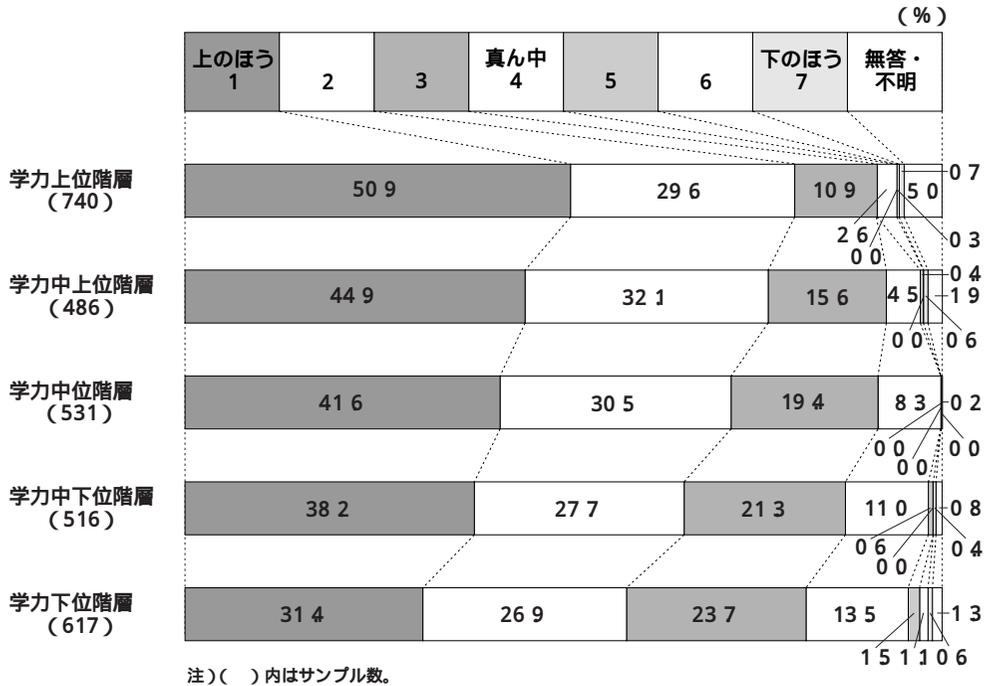
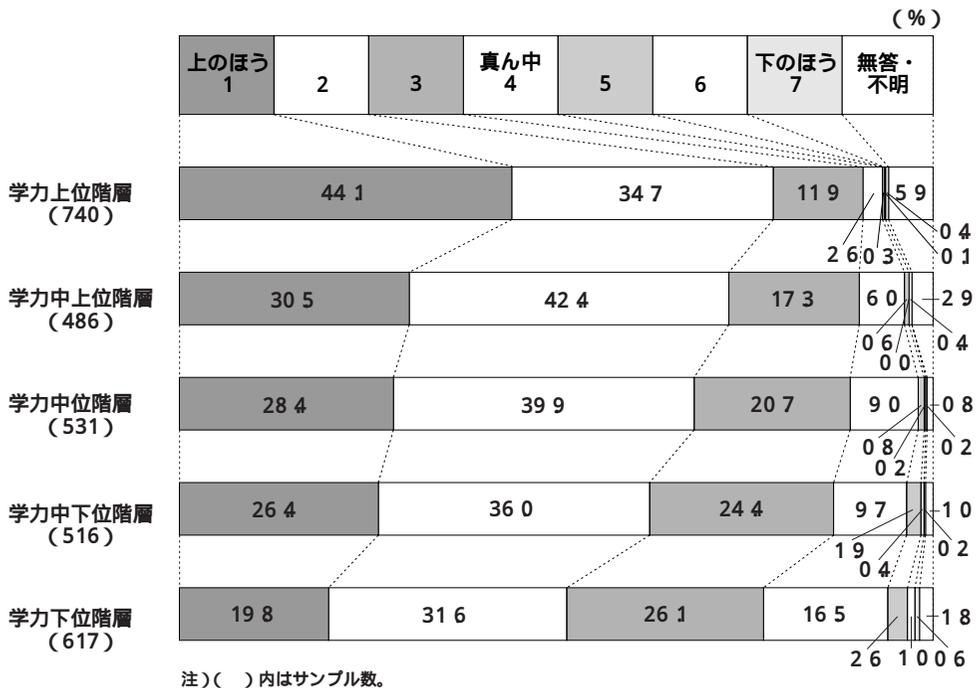


図2-2-2 がんばればとれると思う成績(3教科合計の学力階層別)



③成績観・学力観と学力

学力上位層ほど、「名門大学志向」「勉強本位志向」が強い。逆に学力下位層ほど、「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」「ともかく合格志向」「学校生活エンジョイ志向」が目立つ。



あなたは、次のように思うことがありますか。

どのようなレベルの成績（学力）をとりたいと思っているのかを、別の角度から尋ねた設問と、3教科合計の学力階層との関連を示したのが、表2-2-3である。

学力上位層ほど強いのは、以下の傾向である。

名門大学志向 できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい。

勉強本位志向 今は勉強することが一番大切なことだ。

逆に、学力下位層ほど、次の志向が強くなっている。

ふつうの生活志向 将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい。

ともかく合格志向 どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい。

学校生活エンジョイ志向 学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない。

成績アスピレーションは、学力階層によって、こうした質的な相違も示している。

表2-2-3 成績観・学力観（3教科合計の学力階層別）

(%)

	3教科合計の学力階層				
	学力上位階層 (740)	学力中上位階層 (486)	学力中位階層 (531)	学力中下位階層 (516)	学力下位階層 (617)
将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい	30.3	38.5	39.5	45.7	<u>57.2</u>
どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい	20.0	26.3	28.1	32.0	<u>37.8</u>
できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい	63.4	<u>65.2</u>	<u>65.2</u>	56.2	<u>49.8</u>
学校生活を楽しめれば、成績にはこだわらない	<u>17.8</u>	19.8	19.8	18.8	<u>25.8</u>
今は勉強することが一番大切なことだ	<u>26.4</u>	22.2	20.2	19.2	<u>17.5</u>
そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう	<u>8.2</u>	10.3	9.6	8.9	<u>12.8</u>

注1) 複数回答。

注2) 下線は最大値と最小値。

注3) ()内はサンプル数。

2 . 学習上の悩みと学力

学力下位層ほど、多くの学習上の悩みを抱えている。特に、学力上位層と比べて下位層では、「上手な勉強の仕方がわからない」「努力しても成績が思うように上がらない」「どうしても好きになれない科目がある」「もっと科目の数を減らしてほしい」という回答が多い。



あなたは勉強について、次のように思うことがありますか。

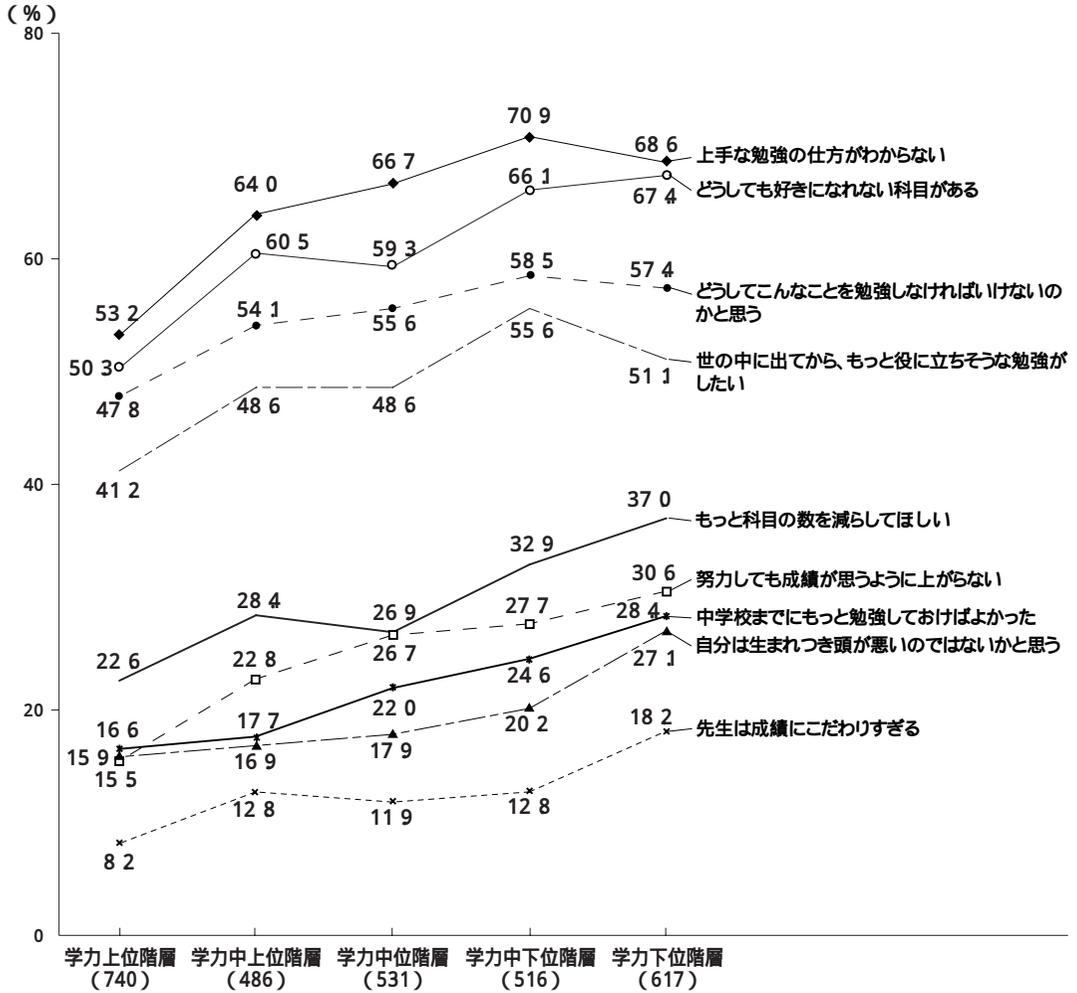
学力の高さによって、学習上の悩みは異なっている(図2-2-3)。概して、学力下位層ほど「そう思う」という回答が多く、学習上の悩みを多く抱えていることがわかる。

「学力上位階層」と「学力下位階層」の数値の開きが15%程度あったのは、次の項目で

ある(いずれも、「学力下位階層」のほうが「そう思う」という回答が多い)。

- ・上手な勉強の仕方がわからない
- ・努力しても成績が思うように上がらない
- ・どうしても好きになれない科目がある
- ・もっと科目の数を減らしてほしい

図2-2-3 学習上の悩み(3教科合計の学力階層別)



注1) 複数回答。

注2) ()内はサンプル数。

3. 進路・進学意識と学力

①希望する進学段階と学力

「大学院まで」および「四年制大学まで」を希望する生徒は、学力が下がるにつれて減少し、代わって、「短期大学まで」と「専門学校・各種学校まで」が増加する。しかし、上級学校への進学は、学力のみによって決まっているわけではない。「高校まで」を希望する生徒のうち、55.0%は「学力下位階層(最下位)」だが、「学力中上位階層」「上位階層」の生徒も、合わせて12.5%いる。「学力下位階層」の生徒の比率がもっとも大きいのは、「高校まで」(55.0%)ではなく、「専門学校・各種学校まで」(59.0%)である。セカンド・ベスト(中上位ランク校)以下の高校では、学力が下がるにつれて、大学院・四年制大学希望率が低下する。上位ランク校では、「学力下位階層」でも9割以上の生徒が「大学院・四年制大学」を希望している。上位ランクの高校では、学力にかかわらず生徒たちを四年制大学への進学へと水路づける学校風土(校風)が優勢である。



あなたは将来、どの学校まで進みたいですか。

学力階層別に、希望する進学段階を示したのが、図2-2-4である。「学力上位階層」では、「大学院まで」を19.5%、「四年制大学まで」を74.7%が希望している。「大学院まで」および「四年制大学まで」を希望する生徒は、学力が下がるにつれて減少し、代わって、「短期大学まで」と「専門学校・各種学校まで」が増加する。「学力下位階層」の希望は、「大学院まで」1.8%、「四年制大学まで」63.4%、「短期大学まで」5.3%、「専門学校・各種学校まで」20.7%と、さまざまな校種に広がっている。

これを集計の方向を逆にして、ある進路を希望する者が、どのような学力の生徒によって構成されているのかをみたのが、図2-2-5である。図2-2-4から予想されとおり、「大学院まで」「四年制大学まで」の希望者に学力上位層が多く、「短期大学まで」「専門学校・各種学校まで」の希望者に相対

的に低い学力の者が多いという傾向は確認できる。しかし、希望する進路は、学力のみによって決まてはいないことに留意する必要がある。「高校まで」を希望する者のうち、55.0%は「学力下位階層(最下位)」だが、「学力中上位階層」「上位階層」の生徒も、合わせて12.5%いる。「学力下位階層」の生徒の比率がもっとも大きいのは、「高校まで」(55.0%)ではなく、「専門学校・各種学校まで」(59.0%)である。

「大学院まで」と「四年制大学まで」をまとめて、学校ランク・学力階層別に、希望率を示したのが、図2-2-6である。セカンド・ベスト(中上位ランク校)以下の高校では、学力が下がるにつれて、大学院・四年制大学希望率が低下する。たとえば、下位ランク校をみると、「学力上位階層」の大学院・四年制大学希望率100.0%は、学力が下がるにつれて94.7% 82.8% 73.8% 62.0%

(学力下位階層)と低下していく。ところが、上位ランク校では、学力による大学院・四年制大学希望率の差がみられず、「学力下位階層」でも9割以上の生徒が「大学院・四年制大学」を希望している。このことは、中上位ランク以下の高校では、学力が進学アスピレーションの冷却効果を持っているのに対して、上位ランクの高校ではそれが無いことを示し

ている。逆にいえば、上位ランクの高校では、学力いかにかわらず生徒たちを四年制大学への進学へと水路づける、何らかの学校風土(校風)が優勢であることを物語っている。生徒の進学アスピレーションは、個々の生徒が持っている学力だけによって規定されるわけではない。どういう学校に在学しているのかも重要である。

図2-2-4 希望する進学段階(3教科合計の学力階層別)

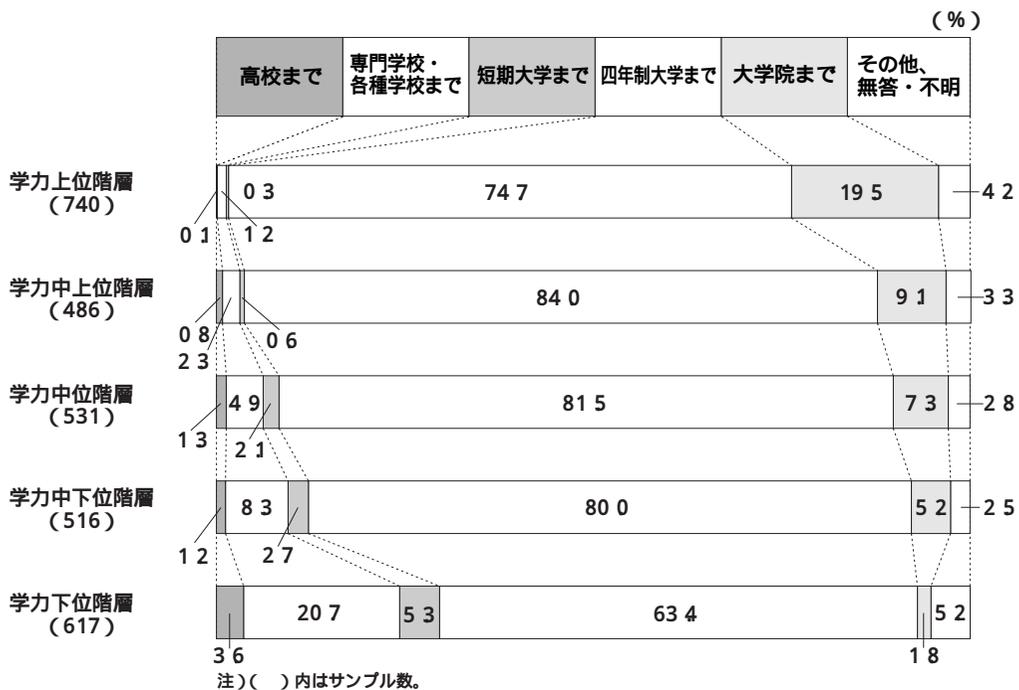


図2 - 2 - 5 3教科合計の学力階層（希望する進学段階別）

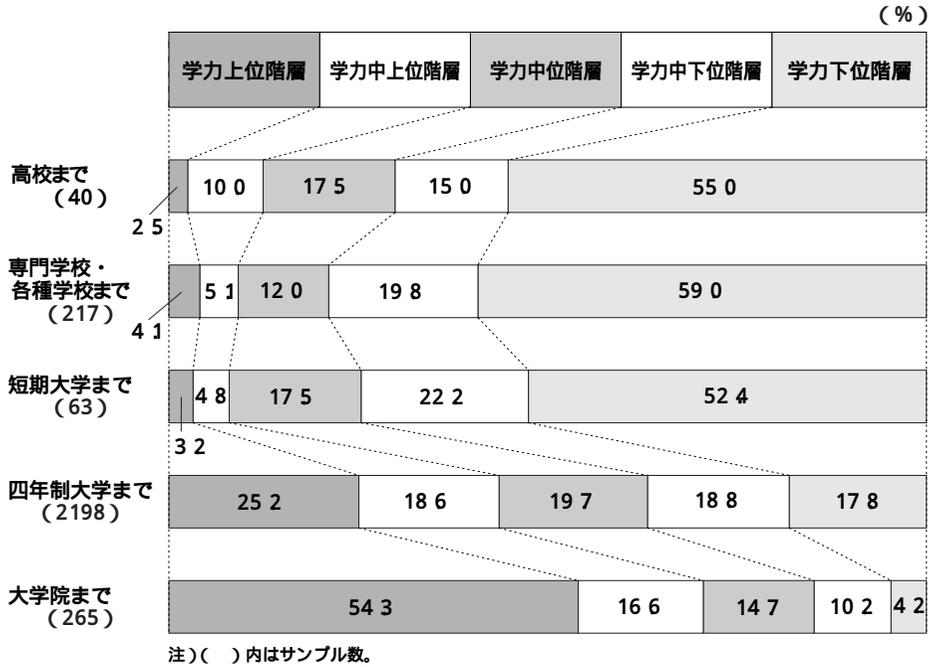
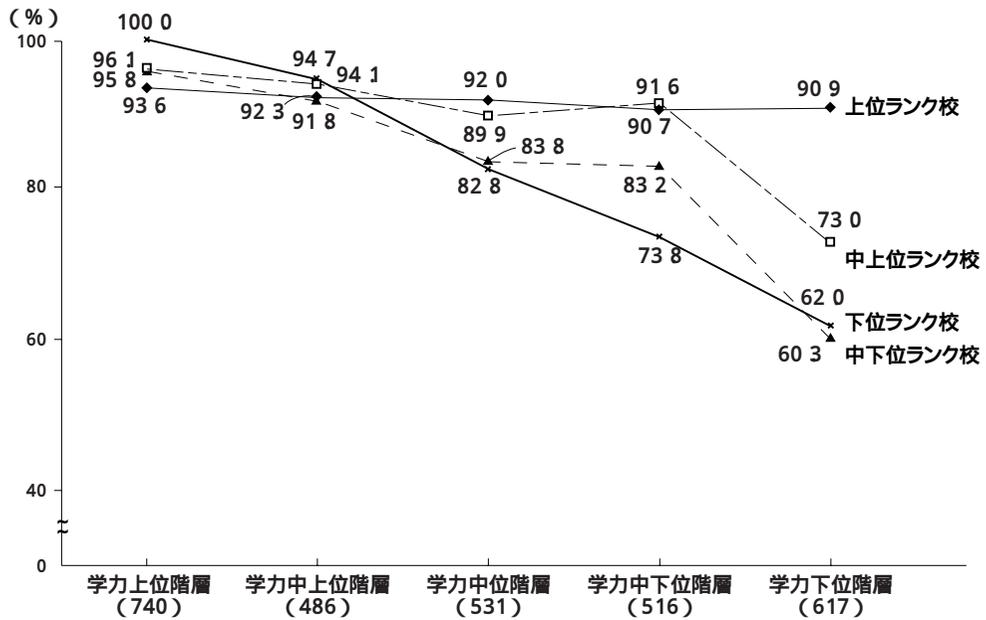


図2 - 2 - 6 四年制大学(大学院含む)進学希望率(学校ランク別×3教科合計の学力階層別)



②希望する大学のタイプ・入試方法と学力

学力が下がるに伴い、「難関ではない大学」と、「私立大学」の希望者が多くなる。入試の方法は、学力上位層ほど「一般入試」を希望する生徒が多く、下位層ほど「推薦入試（AO入試）」が多い。

Q

「四年制大学まで」あるいは「大学院まで」と答えた方にうかがいます。

あなたは、どんな大学へ進みたいと思っていますか。

大学へ進学する方法には、大きく分けて「推薦入試（AO入試）」と「一般入試」の2つの方法があります。あなたは、どちらの方法で進学したいですか。

図2-2-7は、学力階層別に、希望する大学のタイプをみたものである。学力によって希望する大学のタイプは異なっている。「学力上位階層」では、47.1%が「難関の国公立大学」、42.8%が「それ以外の国公立大学」を希望しており、ほぼ9割が国公立大学希望者で占められている。これとは対照的に、「学

力下位階層」では、「難関の国公立大学」は6.5%、「難関の私立大学」は5.7%にすぎず、それ以外の大学を志望する者がマジョリティである。概して、学力階層が下がるに伴い、「難関ではない大学」と、「私立大学」の志望者が多くなる傾向にある。

図2-2-7 希望する大学のタイプ（3教科合計の学力階層別）

	難関の 国公立大学	それ以外の 国公立大学	難関の 私立大学	それ以外の 私立大学	その他、 無答・不明
学力上位階層 (697)	47.1	42.8	2.4	7.2	0.6
学力中上位階層 (452)	29.4	56.6	5.5	4.9	3.5
学力中位階層 (472)	18.9	59.7	6.4	8.3	6.8
学力中下位階層 (440)	15.9	55.0	7.5	14.1	7.5
学力下位階層 (402)	6.5	54.5	5.7	25.6	7.7

注) ()内はサンプル数。

希望する入試の方法も、学力によって対照的である(図2-2-8)。学力上位層ほど「できれば一般入試で」が多く、下位層ほど「できれば推薦入試(AO入試)で」が多く

なる。ただし、「学力上位階層」でも推薦入試を希望する者が4人に1人(25.3%)に及んでいる。

図2-2-8 希望する入試の方法(3教科合計の学力階層別)

